

## 韓国の地理学30年 (1945~'75)

—学会と大学地理学科の創設—

樋口節夫\*

大韓地理学会 Korean Geographical Society は1975年11月30日に創立30周年記念の大会をソウル大学校教授会館で開催した。その主題は「地理学30年の回顧と展望」であった。解放以後の分野別業績を総整理し、将来への方向を模索したものであった。この結果が機関誌『地理学』Chiri Hak 13号(1976)に集録されている。各分野の論文担当者は次のようであった。

- 李 燦……………会長 基調演説……………3
- 朴魯植・朴東源……地形学……………7
- 金蓮玉……………気候学……………13
- 姜大玄……………都市・村落地理学……………20
- 邢基柱……………経済地理学……………28
- 盧道陽・張保雄……文化・歴史地理学……………36
- 鄭璋鎬……………地理教育……………41
- 趙東奎……………応用地理学……………50

各論巧は大会における報告と討論の結果を集約し、内容に修正と補完がなされたものであるから、韓国の地理学会の現況を把握するのに便利である。かつ、各分野を代表すると思われる参考文献を付記しているので、現地の研究を進める人びとにとっては必携の資料ともなるだろう。

本稿は巻頭の会長、基調演説および参考文献、学会消息により、隣国の地理学会および大学地理学科の創設時を中心に、現在におよぶ足跡を紹介したものである。

\*愛知教育大学地理学教室

### I 地理学会発足当初のころ

大韓地理学会の前身「朝鮮地理学会」は1945年9月11日ソウル市寿松洞に位置した中東学校で創立総会をもち、1949年にその名称が「大韓地理学会」と改称された。当時、城南中高等学校教員であった盧道錫 Do-Yang Rho を中心に、総会には約20人の中等学校地理教員が参集した。当時の大学関係者は陸芝修(平壤師範)、金鐘遠(京城大学・地質)のみであったから、その主たる事業は中等学校地理教授要項を作成することにあつた。したがって学会における研究発表でも「地理教育」が主題となっていた。地理学に関しては、一般的・啓蒙的なものが中心であつた。これら発足当初の実際は、『地理学』1号(1963)に「学会の沿革と近況」として集録されている。けれどもこの期に到達するまでに、6・25事変(朝鮮戦争)の困難と釜山市への学会活動中心の移転をも経験したことを付記したい。

### II 地理学人口の増加と大学地理学科の創設

表1(地理学・地理教育専攻学生入学定員)のとおり、1940年代ではソウル大学校および慶北大学校の師範大学において、中等教員養成を主目的にした地理教育の専攻があつた。この分野の学科名は社会科学科、社会生活科、地理科、社会科、社会教育科…と変更があつた。1950年代後半において、その学的性格から、専攻者間に地理学、地理教育の2面的傾向が出てきた。このようなことで、韓国では歴史的に、ソウル大学と慶北大学の師範大学出身者が創草期の韓国地理学会の主役となり、またのちほど登場する全国の各大学にお

表1 地理学・地理教育専攻学生入学定員表

| 区 分                 | 1950 | 1960 | 1970 | 1975 |
|---------------------|------|------|------|------|
| 地理学科                |      |      |      |      |
| ○ソウル大学*文理科大学 (1958) | •    | 20   | 20   | 20   |
| ○慶北大学*文理科大学 (1962)  | •    | 20   | 20   | 20   |
| ●建国大学*文理科大学 (1960)  | •    | 20   | 20   | 20   |
| ●慶熙大学*文理科大学 (1958)  | •    | 30   | 30   | 30   |
| 小 計                 |      | 90   | 90   | 90   |
| 社会教育科地理専攻           |      |      |      |      |
| ○ソウル大学*師範大学 (1946)  | 20   | 20   | 30   | 30   |
| ○慶北大学*師範大学 (1947)   | 20   | 20   | 20   | 20   |
| ●梨花女子*師範大学 (1951)   | •    | 20   | 20   | 20   |
| ○公州師範大学 (1960)      | •    | 20   | 20   | 20   |
| ●東国大学*師範大学 (1969)   | •    | •    | 10   | 30   |
| ●誠信女子師範大学 (1972)    | •    | •    | •    | 30   |
| ●清州大学 (1971)        | •    | •    | •    | 20   |
| ●清州女子師範大学 (1975)    | •    | •    | •    | 30   |
| ●祥明女子師範大学 (1973)    | •    | •    | •    | 30   |
| ●明知女子師範大学 (1973)    | •    | •    | •    | 20   |
| ●釜山女子師範大学 (1975)    | •    | •    | •    | •    |
| 小 計                 | 40   | 80   | 100  | 250  |

(注) ○国立大学, ●私立大学, \*総合大学校

ける地理学担当者になった。けれども両大学での地理専攻者は僅少であった。ソウル大師大では李智皓教授、慶北大師大では洪慶姫教授が創設者として功があった。

一般大学における地理学研究目的の地理学科の創設は1950年代後半になってからである。

ソウル大学の文理科大学、慶熙大学の文理科大学ではそれぞれ1958年に地理学科が創設され、続いて建国大学と慶北大学にも専攻ができた。

このようなことで、大学における地理学（教育をふくむ）専攻は1950年代は全国で2大学40名であったが、1960年代に地理学科4大学90名、地理教育80名、1970年代地理学科4大学90名、地理教育5大学100名、1975年地理学科4大学90名、地理教育11大学250名となり、師範大学における定員増が注意された。けれども、その指導者である教員の定数はまだ十分に満たしてはいない。これら学科・専攻増設には各教育大学（江陵教

表2 碩士学位授与者数

| 大 学 院       | 設立年代 | 1971<br>まで | 1971<br>~'75 |
|-------------|------|------------|--------------|
| ソウル大・大 学 院  | 1951 | 15         | 8            |
| 慶 北 大・大 学 院 | 1951 | 10         | 6            |
| 慶 熙 大・大 学 院 | 1958 | 6          | 8            |
| 建 国 大・大 学 院 | 1963 | 2          | 9            |
| 梨花女大・大 学 院  | 1965 | 2          | 1            |
| ソウル大・教育大学院  | 1964 | 10         | 16           |
| 慶 北 大・教育大学院 | 1966 | •          | 7            |
| 高 麗 大・教育大学院 | 1968 | 4          | 16           |
| 梨花女子・教育大学院  | 1966 | 1          | 9            |
| 慶 熙 大・教育大学院 | 1972 | •          | 2            |
|             |      | 54         | 82           |

育大他15教育大学）および私立初級大（啓明大初大他19初級大）の設立も関係していた。したがって、その指導者養成のための大学院における地理学研究が1970年以降に活発となった。この場合、表2（碩士 日本の修士相当・学位授与者数）をみる限り、ソウル大学の役割が再認識できると思う。なお、大学院における博士課程の学位既得者は「李朝時代の産業地理」により、盧道錫が慶熙大学より理学博士を授与されたのみである。地理学専攻者のうち、学位保持の科学者は海外留学経験者ということになる。

### III 機関誌『地理学』の発刊

1960年代に入ってから、地理学専攻者の増加、大学院（教育大学院をふくむ）の創設が続いて、地理学人口が膨張し、その科学的水準向上を願って、学会誌の発刊を期待する人びとが多くなった。このことに関して、リーダーシップをとったのは李廷冕、李燦の両氏であった。外国における経験を基礎にして検討されたが、経費問題や掲載論文の内容から、創刊をみたのは1963年であった。当初において、年報の体裁をとりながら、第2号は3年後の1966年となっている。これには学会誌発刊困難の国内事情も考えられる。定期に年報がでるようになったのは1968年以降のことであった。

1974年（9号）から年2冊発刊となった。この財源は会費および補助金・援助金によっている。1975年現在（1号～12号）の掲載論文71編のうちわけは、地形9、気候8、集落3、人口・都市11、農業8、工業9、文化・歴史8、学史3、政治2、環境知覚2、地図学2、地理教育1、その他5…となっていた。学会の出発当初において地理教育を主にし、会員の大多数は中等学校の地理教員であったとはいえ、機会誌はこの期において専門化し、レベル向上のあとが知られる。

#### IV 地理学・地理教育の貢献

1945年以前、大学における地理学の地位は重要視されなかった。ただ中等高等学校における教科目として安定した位置を占めた関係から、当初において、その指導者養成に、各大学の師範大学が大きな役割をしめてきた。一般大学において、地理学科が設定されてから、近々20年である。これには先人の努力があった。地理学徒の学校以外への進出は1960年代後半からである。政府機関、言論機関等への進出なかでも、都市計画・地域計画…等への参加が顕著である。これには、1960年代アメリカ地理学会における計量革命が大きな刺激剤となっている。各分野の研究者による地理学の実学化も活発に行われてきた。（地形学・気候学、都市・村落地理学、経済地理学、文化・歴史地理学、地理教育、応用地理学、…各分野別の回顧と展望の項参照のこと）。

なお、韓国地理学会の国際活動の参加は、1957年東京でのIGU地域会議にはじまり、1960年の第19次大会（於、ストックホルム）での加入をもって正式のものとなった。けれども言語問題と参加旅費等の関係から充分ではなかった。

以上は会長李燦の基調演説により、韓国地理学会の一般を紹介したものである。

現地の各大学・大学院では次のような学術誌を発行している。地域調査の実際や、各大学の実情を知るには最適のものと思われる。けれども梨花女大の「緑風

表3 各大学・大学院発刊学術雑誌

|                                  |
|----------------------------------|
| ・ソウル大学校 師範大学, 「地理」*, 1959年       |
| ・梨花女子大学校 師範大学, 「緑風会報」, 1959年     |
| ・建国大学校 文理科大学, 「地理学報」, 1969年      |
| ・ソウル大学校 文理科大学, 「酪山地理」, 1970年     |
| ・慶熙大学校 文理科大学, 「地理学叢」, 1970年      |
| ・ソウル大学校 教育大学院, 「地理学と地理教育」, 1973年 |
| ・首都女子師範大学, 「君子社会」, 1975年         |
| ・清州大学, 不詳,                       |
| *途中断, 各年は創刊年                     |

会報」をのぞけば発行巻数も少なく、かつ入手困難という難点がある。ともあれ、隣国の地理事情に関心ある人びとへの参考の一助といたく付記したわけである。